

北 どころ

第46号 2020年1月1日（毎月1日発行）

旧三上郡三十三か所霊場⑬ ふるさとの巡礼地を訪ねて

第二十九番札所

川手慈眼山 観音寺

かの岸にいたりやすべき此川のなみまにかむ法の友船
(彼岸という煩惱のない世界に行き着くために、仏法というありがたい船が波間に浮かんで、あなたが乗るのを待っていてくれるのです。)

「川手はもと一村となし川手村

と称した。芸藩通志には川手村のことを『或は云、倭名抄の神代、此辺なりやと、広十二町、表十三町、東北は、山塞ぎ、西南は、地ひらけて西城川に沿ふ。居民農余に、菅笠を製す。庄原町に出して、

四方に売る。故に世には、庄原笠と称す。専ら此村より作り出す。』と紹介している。菅笠製造は柳原の製紙とならんで有名で、戦時中まで続いた。観音寺は、西城川の青木井手より引かれた灌漑用水路の傍に位置する寺院で、西南にひらけた田園の北の山麓にその建てものを遠望することができる。」「(旧三上郡三十三か所霊場探訪記)、以下「探訪記」と略称)。

音寺前住職の世応俊芳氏が、観音寺の縁起と歴史について寄稿している。「山内首藤十三世甲山城主首藤広道の弟首藤資治、のちに片岡と改姓し片岡土佐守資治と云う。天正年間川手村に帰農し当地方の農産物と山陰の海産物を取引する廻船問屋を兼ねて当地を開拓し、当地方きつての豪農となる。…塗屋家のおこりである。

この片岡土佐守資治、梅甫林和尚を請じて川手村沖に聖観世音菩薩をご本尊とする観音寺を建立する。(中略)

文政年間、四世旭軸薫和尚の時、川手村屋敷谷十六番地に移転し、その際阿弥陀如来をご本尊とする尼寺が荒廃しているのを脇本尊としてお迎える。」

境内には、いたるところに地藏菩薩の石像が安置されている。山門の両脇にも、それぞれ二体の地藏菩薩が錫杖を持って凛と起立している。山門をくぐると、どこかユーモラスな猪首のお地藏さまに出逢った。現代的な風貌なので、近代の寄進だろう。地藏菩薩は、大地が全ての命を育む力を蔵するように、苦悩の人々を、その無限の大慈悲の心で包み込み、救う所から名付け



「川手風土記」に、観

られたとされる。観音信仰も合わせ、庶民の願いが籠った霊場である。本堂横にある太子堂の傍らには、近隣の土地から集められたのか、風雪を経た石仏が数多く並んでいる。まるで、殺伐とした現代社会から避難しているかのように思えた。

どっしりとした本堂は風格があり、来歴もすっかりした寺院なのだが、現在は無住寺となつてしまい、実留町にある円福寺の住職が兼務している。過疎地の後継者問題は、お寺でも深刻である

第三十番札所 柳原 香面堂

よぢのぼるたつの尾山はおのづから清くものりの雨はふりけり

御詠歌の意識を書こうとして、迷った。この「たつの尾山」は、香面堂のお堂の背後、山深くにある龍尾山のことだろうか。「急峻な斜面を登っている巡礼者を歓迎するように、清らかな仏法の教えが雨のように降り注いでいます」と書こうとしたが、香面堂は山麓にある。登り龍の尾のような山、という意味だろうか。

「御詠歌の額に記されている所書きに『庄原村』とあるように、柳原はもともと庄原村の一小字である。しかし、『柳原の製紙』として近年まで親しまれてきたこともあって、この地名がよく知れわたっている。

この観音堂は大仙谷の田村実氏宅



の裏手にあり、堂の横手は昔の墓地となつており堂前にも五輪石が寄せられている。田村家の屋号を河面とよぶ。香面堂の香面と屋号の河面、同一の呼び名である。」(探訪記) 「こうめん」の呼び名については、昨年(平成三十一年)三月に庄原自治振興区から発行された「庄原の歴史文化を未来に繋ぐ(資料編)」で、解説されている箇所がある。

かつて庄原には「永江荘(ながえのしよう)」という荘園があり、その中心地の一つであつたと推定される本町(柳原)には「こうめん(香免?)」「ゆうめん(木綿免?)」といった寺社で使う香や祭事用品を調達する費用を賄うための免田や、「まごころ(政所、問所?)」という役所に由来する

と思える屋号が残っている、このこと。

田村実氏の子息である田村才三氏に案内してもらつた。田村家の裏手の林の中に、小さなお堂が建っている。額面は正面の軒下の梁に掲げられて健在。堂内の中央に木像、左右に石仏が安置されているが、由来は不明。木像は烏帽子を被っているので、観音像ではないようだ。

周辺に墓石が林立しているのだが、その土台に自然石を敷き詰めている。他所の墓地では見られない形式なので、何か意味があるのだろうか。奥まつた場所に一基だけ、笠石を載せた立派な墓石がある。刻まれている戒名は「涼秋妙紅善女」、側面には「享保十七天」とある。他の墓石で確認できる戒名も女性のものなので、尼寺の墓所だったのかもしれない。



裏山の太山山にある大仙神社に登った。牛馬の守り神として、近郷に広く信仰されていたという。山道を一〇分ほど歩いて、ようやく参道の石段の前に出た。これからが本番である。長く険しい石段が延々と続いている。才三氏の子供の頃は、社殿の下の広場で、相撲大会が開催されていたそう。

さらにこの奥が龍尾山で、本町の宝蔵寺の山号である。宝蔵寺はかつて川北町の勝光山にあつたと伝えられ、のちに龍尾山に移つた。その後、同じ柳原の堂迫山、さらに現在地へと移転(正保二年、一六四五)したが、今でも龍尾山の山号を称している。

西本町の住宅地にある「香面堂」(消しゴムはんこ手作り雑貨の店)のオーナー、田村かをりさんは、才三氏の娘さんである。



無着成恭編『山びこ学校』

——村の貧しさまで書いて

このコラムは、10月に掲載した第

43回の『青い山脈』以来、戦後の日本で評判になった作品、年代順に取りあげています。私たちの気持ちの中に、意識しない間に積もり重なっている「戦後」の歴史、振り返ってみたいと思っただからです。

今回、戦後6年目の1951年に出版され、評判になった無着成恭編『山びこ学校』（青銅社刊、後に岩波文庫・他）を取りあげます。東北・山形の山中の中学2年の学級文集が、日本の作文教育を変えるほどに注目されたのはなぜなのか、探りたいとおもいます。

戦後の日本の復興は、その45年9月に枕崎台風、46年は昭和南海地震、47年にカスリーン台風と苦難の連続でした。特に地方の山間部は復興からも取り残されていました。子どもたちが生活の改善を考えると、常に農業による貧乏に突き当たったのでした。足元を見つめる作文は、43人のクラス全員が書きました。

「すみ山」という石井敏雄君の作文の終わりの部分を紹介します。

夏は夕方五時まで山にいます。かえりはすみをせおってきます。大し

おっつあん（父）が、「今日学校さいいいいい。」といったので、私はよろこんで学校にいきました。そのかわり帰りに塩とさとうをかってこいといいました。学校からかえると、どいがまに、しばせおいにゆかねなければいけま

また読んでみたい本④6

青年たちに

音谷 健郎



【岩波文庫版の表紙】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第46回は、無着成恭編の『山びこ学校』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

ひ（地名）のあたりまでくるとあせ

が（を）だらだらかきます。そこまでまだ半分ぐらいしか来ません。家にかえると六時半ぐらいになっていきます。支度をほごして（ほごいて）、ごはんをたべて、わらをぶちはじめます。

江口江一君の「母の死とその後」は、全国作文コンクールで文部大臣賞を貰います。「すみやき日記」という長編もあります。「学校はどのくらい金がかかるものか」という作文は7人

が手分けして調べた報告で、具体的な数字で埋まっています。

出版するかどうかは、学級で話し合いました。「貧乏の恥をさらすだけだ」「暮らしが明るみに出て父、母がよろこばない」という意見が根強くありました。決を採ったら欠席3人、出版に賛成29人対反対11人でした。「裸のままを知って貰って、勉強するのだ」と最後は出版に踏み切りました。

出版するとたちまち10万部を超えました。作文教育界が活気づきました。本当の実践教育だ、と。

しかし3年後、無着教師は「赤い」（社会主義者）教師と言われて学校を追われます。東京の私立小、中学校で作文教育に取り組みますが、「山びこ学校」のような評判を得ることはありませんでした。

山形の村で、貧乏をそこまで恥じたのは、戦前から続く農民への差別意識の裏返しだが、澱（おり）のように残っていたことを物語ると思います。そこを突き抜けようとした子どもたちの健気さに、世間が胸をうたれたのでした。戦後の復興期の一断面です。

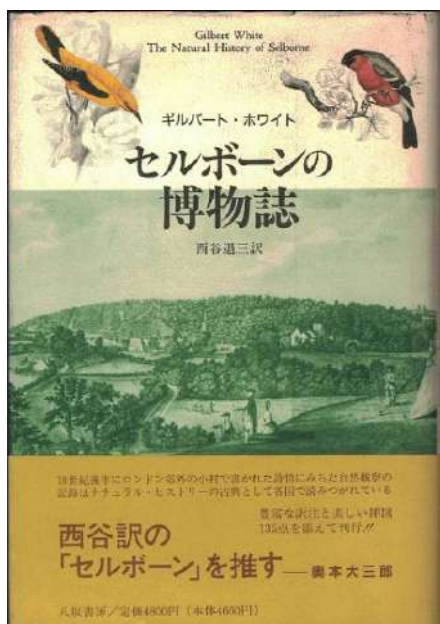
次回は、壺井栄『二十四の瞳』を取りあげます。

虫と草木と人びとと ③④ 中村慎吾

G・ホワイトと「セルボーン」の博物誌

訃報を受けてかけつけた森下雨村は、息を引き取ったばかりの西谷の前で、ただ独り枕許にいた妹の直からペン書きの紙片が手渡された。そこには簡単に「蔵書の始末と遺稿の出版を頼む」旨の遺言が書かれていた。

遺稿の出版を依頼された森下雨村は、かつて編集長をしていた博友社（東京）と契約し、200部を限定販売、非売品として西谷の知人、友人に配布された。それは1958年9月15日、西谷の没後1年3カ月のことであった。蔵書については当時、高知大学付属図書館であった八波直則が、高知大学付属図書館が買いとり、活用したいと考えて交渉していたが、佐川町が購入することになり、青山文庫で保管されている。佐川町が購入し、青山文庫に保管されるまでの西谷の蔵書の整理・登録作業は八波直則を中心に8名が当り、西谷退三の蔵書目録もできている。八波はこの事業が完了した時点で、「文藝春秋」(1



八坂書房版 「セルボーン」の博物誌

961年11月号)に「小さな町の生んだ人」と題して、西谷のことを紹介している。西谷退三訳「セルボーン」の博物誌は、1961年11月15日、博友社から再版されて、一般に販売され

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

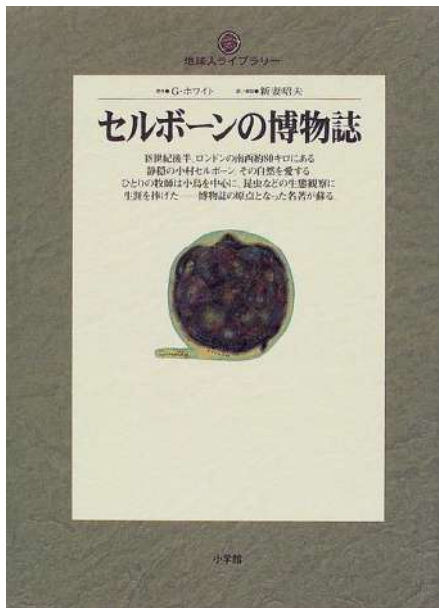
964年8月15日三版が発行されていた。現在は博友社がB6判だったものをA5判に改め、美しい挿絵を入れた新版が、八坂書房から1992年11月30日に出版されている。八坂書房は、新版の発行に当り、仮名づかいは現代かなづかいに、旧字体の漢字は新字体に、漢字表記の国名・州名はカタカナに、地名・人名は現行のカタカナ書き、副詞・代名詞の

漢字はひらがなに改め、博友社版にはなかった動植物の美しい挿絵が加えられている。ホワイトの時代のセルボーン地図、ホワイト家の系譜、ギルバート・ホワイトの年譜、西谷退三略年譜、と44ページにわたる編注を巻末に載せ、読みやすく、しかも「セルボーン」の博物誌の理解が深まるように配慮されている。

終わりに

●
ギルバート・ホワイトの旧跡を訪ねたいという永年の夢がかない、柄にもなく「セルボーン」の博物誌の日本への受容の問題に首をつっこんできたが、ようやく、自分なりの答えを見出すことができ、名著をめぐる日英間の文化交流に深い思いを馳せている。それにも増して「セルボーン」の博物誌が、ウォルトン「釣魚

大全」と並んで、イギリス自然文学の古典として高く評価されているばかりではなく、それ以上に生態学の源流に位置づけられていて自然観察・自然研究の原典として今も読み継がれ、根強い人気がある。八坂書房版「セルボーン」の博物誌は、525ページもの大冊なので、なかなか読み切れないところから、最近、新妻昭夫



「地球人ライブラリー」
(小学館) 収録版

が「セルボーンの博物誌」の一部を翻訳して、「序章 ナチュラル・ヒストリー賛歌」、「第二章 夏鳥の観察」、「第三章 小鳥はなぜ歌うのか」、「第四章 渡り鳥の不思議」、「第五章 ツバメ類四部作」、「第六章 鳥類の生態と行動」、「第七章 動物の生態と行動」、「第八章 コオロギ類三部作」、「第九章 自然界の不思議」、「第十章 人々の暮しと人間の知恵」の10章にまとめ、小学館の「地球人ライブラリー」の1冊として「セルボーンの博物誌」を1997年4月20日に発行している。これは全訳でないから、270ページほどの華奢な本で、丹念な註と原著に出てくる鳥などの絵も多く入れられていて、きわめて読み易い。その上、新妻昭夫がつけた解説は、ホワイトの時代に比べて「セルボーンの博物誌」が自然研究の原

点となって根強い人気があることが理解され易い。そして、彼の解説の末尾にある「地球温暖化やオゾン・ホールなど地球環境問題も重要なことだろうが、自分たちが暮らす足元の自然を見つめる視点はもっと大切だろう。人類の活動が地球環境にどのように影響を及ぼしているか、それを見きわめることは大型予算を投入した専門家の研究でも簡単ではない。しかし自分の暮らす地域で、自分の暮らしかたが身のまわりの動植物にどう影響しているかなら、誰にでも研究できるし、もし悪影響が見つかったときには改善することができる。そういうひとりひとりの日常的な努力なしに、地球環境問題は解決しない」という一節は傾聴に値する。

自然観察・自然研究の基本を「セルボーンの博物誌」を通して学び、ギルバート・ホワイトの思想を学びとることは、環境破壊が著しい今の自然環境を守る上でも重要なことであり、自分自身の生き様を考える上でもきわめて大切なことだと考えている。

老いの雑記帳 ②③ 自転車のポンプ とスマホ

旧制中学四、五年の頃のことだった。英語の教師が授業中の雑談でこんな話をした。

「東大文学部英文科の有名な教授が帰宅の途中、自転車のポンプで空気を入れている人をさも珍しそうに見て、暫らくの間立ち止まってじっと動かなかった。」と話した。我々生徒はポカんと口を開けて聞いていた。話には続きがあった。「大学教授だからと言って全てを知っているわけではない。専門以外は殆ど知らないのだ。庶民の生活や日常の

常識を理解しないまま研究だけに没頭しているからだ。だから君たちは英語が読めたり、書けたり、話せたりが出来るだけでは駄目で、英語を使って外国の文化を学び、日本の文化を諸外国に伝えることのために英語を勉強しなさい。」と論じたのだ。

今になってこんな話を思い出したのは理由はがある。戦後の日本は急速な速さで機械化が進み、生活の向上は目を見張るばかりだ。最近ではIT産業が国の経済を支えていると言っても過言ではない。だからIT関連の機器は日毎に進化している。若者はその進化に対応が早く、次々と新しい機器に乗り換える。ところが我々高齢者は努力しても進化に追いつかない。やっと券売機でキップが買えたと思ったら、今度は自動改札。携帯電話でやっとメールを覚えたなら、今度はスマホだ。指先をパネルに触れるだけで何でも出来るのだ。マイッタ！

「続・思いのままに〜我が心の雑記帳〜」(鈴木澄夫著) より

黄金色に輝く落葉の真ん中に、やはり黄金色の装束を身にまとった巨木がどっしりと立っている。途中から二股に分かれた樹高は三十メートル以上、胴回りは軽く七メートルを超えている。推定樹齢五百年の大イチョウである。

胸高にしめ縄がまかれている。その奥に、小さな神社の拝殿がある。おれは、マイクが手にしている爺ちゃんの大イチョウに視線をやった。おれの祖父は、この神社に自分のトランペットを奉納してから、戦地に向かったのだ。無事に帰還して、またトランペットを吹くことができず、祈願した。

神様は約束を守ってくれた。しかし、代償は残酷だった。日本は戦争に負け、多くの戦友たちは供養されることもなく、未開のジャングルの中で朽ちてゆく。広島は新型爆弾で焦土となった。

御神木の太いイチョウは、そうした人間どもの不毛な蛮行を睥睨するように聳えている。祈る気にはなれなかった。感謝する気にはなれなかった。どうして一緒に死なせてくれなかったんだという理不尽な怒りが満ちてくる。

手にしたトランペットを、木の幹

にしたたかに叩きつけていた。さらに怒りに火が付いた。大きく振りかぶったときに、頭上から何か降ってきた。頭に載ったものを掴んで、掌を開くと、黄金色の小さなラツパだった。このイチョウはどういうわけか、こうして筒状になった葉が混じっている。ラツパのイチョウと呼んで、子供の頃にはみんな探し

ラツパの神様(終章)

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子④⑤

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

て、集めた数を競ったものだ。

(もういいんだ。もう、ラツパを吹いてもいいんだよ……)

神様の声が聞こえたのだという。爺ちゃんは、ラツパの葉が入った落葉に顔を埋めて号泣した……。

マイクが地面の葉を拾い上げた。ラツパのような筒状の葉だった。

「御神木……、神様の樹だ。おれの祖

父さんが戦争に行く……」

説明しようとしたおれを、マイクが自分の唇に人差し指を押し当てて黙らせた。おもむろに、ラツパの葉の細い柄の方を、片方の耳に差し込んだ。瞑目して、しばらく耳を澄ませていた。

「音が聞こえる……」

マイクは爺ちゃんの大イチョウ

せて息を吹き込む。リパブリック賛

歌、いつものパワフルな音ではなく、やさしい音色だった。ああ、爺ちゃんの音を思い出しながらなぞっているんだと、すぐに理解した。哀しくて、切なくて、そして楽しい。

風が吹いた。マイクの大イチョウと共演するかのようには、大イチョウの葉がざわめいた。煽られるように、トランペットの音が大きくなる。テンポが上がった。聖者の行進だ。

(チクシヨウ……)

軽トラに走った。座席の下に押し込んでいた楽器ケースから、トランペットを取り出した。リサイクルショップに売ったつもりが、ずるずると先延ばしにしていた。マイクの公演に行つて、ふんぎりをつけるつもりだったのだ。

マイクの前でトランペットを構えると、さすがに緊張した。目を閉じて、マウスピースに息を吹き込んだ。ひどい音だ。頬の付け根がすぐに悲鳴を上げた。煙草になじんだ肺とた

るんだ腹ではパワーも持続力もない。恥ずかしかった。でも、楽しい。いつの間にか、無心になって吹いている自分がいた。

(うん?)

ソロで演奏していることに気づい



かぐ
【迦具神社の大イチョウ】

三次市作木町南部の香淀にある迦具神社のイチョウは、樹高約32m、胸高幹囲7.28mで、四方に枝を広げてその樹冠は舞殿と拝殿の両方の建物にまでかぶさっている。樹齢約500年と推定される。

この樹の下半部の球形の樹冠は、主幹の分岐部付近から発生した不定芽の繁茂したものと認められ、ここには、ラップ状、コップ状、フクロ状などと表現される畸形葉（きけいよう）すなわち杯葉（杯状葉）が見られる。県内有数のイチョウの巨樹であるばかりでなく、杯葉をつける点で全国的にも珍しい例である。

平成2年12月25日、広島県の天然記念物に指定される。
（ホットライン教育広島「広島県の文化財」のサイトより転載）

た。マイクが怖い顔で睨んでいる。
「あんた、名前は？」
「東城貴志……、タカ・トージョーだ」
ハーレムでの名前を言った。
「タカ・トージョー……、『ブラック・バード』にいなかったか？」
働いていた店の名前を言われて驚いた。
「ウェイターをしていた」
演奏をしていたとは言えなかつ

た。
「ステージにも立っていたはずだ。ジャマから、ナチュラルでおもしろい音を出す日本人がいるという話を聞いて、おれはわざわざ『ブラック・バード』まで行ったんだぞ。それなのに、おまえはなかなか出て来ない。仕方がないからビールを飲んでいたら、ちょっと飲み過ぎたのか、騒ぎを起こしてしまったがな」

唾然とした。アーバン・ブルースの帝王、マイク・スタンパーが、わざわざおれの演奏を聴くためにハーレムまで足を運んでくれたのだ。
（この野郎、もっと早く言えばな。もう遅い……）

いや、遅くない。爺ちゃんの声が聞こえたような気がした。マイク・スタンパーになる必要はないんだ。クリフォード・ブラウンやマイルス・デイビスになる必要もない。いや、どうあがいたってなれはしない。自分の音を吹けばいいんだ。だって、こんなに楽しいじゃないか。

マウスピースを銜えた。無意識に、チンドン屋のメロディを吹いていた。「竹に雀」、通称「タケス」と呼ばれているチンドン屋の定番だ。マイクがニヤリと笑って、合奏する。帝王がサブにまわって、おれの音を追いかけている。いい気分だ。

「へい、タカ！ おれと一緒にチンドン屋をやらないか？」

白塗り姿のマイクを想像して、おれは爆笑した。

「カルロスが許してくれたらな」

マイクが顔をしかめた。神様のラッパが、スウィングしながら降ってくる――。

まつの古本屋さん
どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日 ※2月は店内整理で全休
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL：090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「糞尿博士・世界漫遊記」

中村浩 著 現代教養文庫

こんな人物がいたんだとびっくり。少年ジャンプで連載された「トイレ博士」の実写版。大学の時、「ガリバー旅行記」に書かれた「人糞をパンに変える研究」に触発されて糞尿博士となる。それは、糞尿を養分に高タンパクのクロレラやスピルリナとなって結実する。

未来のエコロジー社会の救世主として、多くの国に招かれて当地のウンコ博士と交流。あげくはアリゾナの砂漠に単身乗り込み、自分の糞尿で育てたクロレラで自給自足の生活を達成。当時の大宅壮一賞の次点になった快作。出版から50年近く経った現在の糞尿エコロジーは……、美食という人間の尽きない欲望は克服できないものか。



「いねむり先生」

伊集院静 著 集英社文庫

好きな作家を一人だけあげると言われれば、「新麻雀放浪記」の阿佐田哲也。尊敬する作家を一人だけあげると言われれば、直木賞作家の色川武大。同一人物なのである。ナルコレプシー、突発性睡眠症を患う「いねむり先生」と著者との交遊が描かれている。媒介はやはりギャンブルで競輪、絶望した人間の再生の物語でもある。



「ギャンブルは自分のリズムで打(ぶ)つことが大切」、人生も同じなのだ和阿佐田哲也の小説で学んだ。鉄火場を潜り抜けてきた猛者にして、天真爛漫なほどのお人好し。唯一無二の個性を丹念に描写。「先生の魅力はこんなものではない」、著者の声が聞こえてくる。

「原型的日本人」

中野清見 著 東京美術

著者の中野氏は、岩手の山村の村長を務めながら、そのときの見聞を冷徹に分析して書いている。日本の農業が変貌する過程を、赤裸々に告白している。「乏しい生活は強い規制を必要とする」「現代はあらゆるもののテンポが早く、すべてが同質化に向かっている」「馬鹿だからこそ百姓ができるのだ」「小賢しい奴は皆百姓で失敗した」「農業だけで金を儲け、うまい暮らしをしている人間を自分の村では見たことがない」、身内にも辛辣である。



小狡くて図々しくて、そして勤勉で純朴。そんな東北の農民の中に、自分と共通する部分がある。昭和44年発行、古本屋をやっていないと出会わなかった一冊。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣(店内専用通貨)であれば半額、現金であれば3割で買戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくる俳壇&歌壇

冬ざれや一本杉に継ぎの松

誓子句碑傍へに躑躅帰り花

冬霞中より人の現われる

ふる里へ落葉踏み行く峠道

極月の都大路に纏こ纏とぎ

一つ得てひとつ失う去年今年こぞことし

寒いとて忙しいとて鍋料理

湯気のみこうつまに白髪つまの夫

竹地 恵美

冨久光

片岡 正人

隆愚

大槇 三代子

赤川 冬人

松岡 初枝

※参加を歓迎します。

食べるのだ。

それを眺めていた家臣たちに、安堵の表情が広がる。多くの重臣たちが戦死して、重苦しく澱んでいた空気が一変する。旺盛な食欲を見せる我が殿の姿に、まだまだ大丈夫なのだと安心したのである。

最近、昼食に湯漬けを食べることが多くなった。副食は梅干しやキムチ、塩昆布、それだけでは寂しいので、自作のキュウリの酢漬けや、葉物野菜のお浸しに鰹節をまぶして醤油で食べる。

一人で古本屋を営んでいるので、留守番をしてくれる人もいないので、のんびり昼飯を食べていられないという事情がある。お客さんが来たら、という緊張感が抜けないので、麺類などの喉越しの良いものを求めてしまう。しかし、食べている最中に来客があったら、麺はふやけてしまう。

湯漬けだったら大丈夫だ。ふやけてしまっても、そのまま電子レンジでチンすれば、おかゆに変身する。それもまた、寒い時は格別においしく食べられる。冷蔵庫の食べ残しの古いご飯も、湯漬けにするとふっくらとおいしく食べられる。副食物を変えれば、飽きることもない。

清水精一の「サンカとともに大地に生きる」を読んで、食に対する意識が変わった。著者は修行のために山籠もりするのだが、主食は松葉だったという。松の葉を食べても人は生きられるのだ。

食べ物に対する感謝の念が深まった。粗食などという不遜な言葉は存在しない。みんなありがたいご馳走である。命の源なのである。しっかりと味わって、食べるようになった。食欲は旺盛、しかし贅沢なものを食べたいという欲望は薄くなった。これも老いであるなら、大いに歓迎する。

投稿&寄稿

「湯漬け」 赤川 仁洋

テレビドラマのワンシーンが未だ脳裏に残っている。NHKの大河ドラマ「徳川家康」、調べてみると昭和五十八年放映だというから、わたしが二十代の半ばだった頃のことである。

三方ヶ原の戦いで、武田信玄に惨敗した徳川家康は、命からがら居城の浜松城に逃げ帰る。ざんばら髪で憔悴した家康は、「腹が減った」と家臣に命じて、湯漬けを持って来させる。木椀いっぱいつまの白い湯漬けと、大きな赤い梅干し。徳川家康を演じる滝田栄が、それを実にうまそうに



◆特別寄稿◆

長崎にも行った頼杏坪

高柴順紀



頼杏坪（谷文晁『近世名家肖像』より）

絶好の秋日和の一日、みよし風土記の丘ミュージアムに行く。守屋壽氏の古地図コレクションが目当てだった。中でも江戸時代最も人気があった長久保赤水の日本図（赤水図）に備後国がどのように描いてあるのを見たかったのです。しかし、残念ながらその部分は小さくてかつ老眼の為よく見えなかった。でも伊能忠敬に水戸の赤水は坐（いながら）にしてよく図を作ったのもだとうならせたという赤水図はさすがでした。

詳しくは知りませんが赤水は頼杏坪とよく似た人格のある勉学の人で、地元では顕彰会が作られているよう

で、面白いことに二人とも同じ動機で長崎に行っているのです。杏坪の『老の絮言（ヲヒノクリコト）』の中に「長崎行」という一文が載せられています。赤水も『長崎行役日記』を残しています。

どちらも広島藩、水戸藩の漂流民を引き取りに長崎まで行った一件を記しているのですが、引き取り役はともかく鎖国の時代を生きた当時の文化人としては異国のことを知る千載一遇の機会だったに違いありません。どちらも長崎での行動を詳しく記録しており、漂流者の引き取りもそこそこにして阿蘭陀屋敷や唐人屋敷への見学をしています。両者の記述を見ると、見学ルートは同じみたくて決まった観光ルートが有ったのかもしれない。杏坪よりも赤水は絵入りでより詳しく記録しています。どうやら赤水は紀行文として世に出す計画を最初から持っていたのでしよう。彼の死の四年後にはなりませんが『長崎行役日記』が大坂で刊

行されているのですから。

水戸藩の一行は二十一名で、かたや杏坪の方は少人数で僅か二十九両もらったの長崎行でしたが、当時すでに保護された漂流者の取り扱いは取り決めが有ったとは驚きです。しかし楽しい長崎行も杏坪にとつての帰途は散々な結末でした。ことも有ろうか連れの人々が酒癖が悪くて他

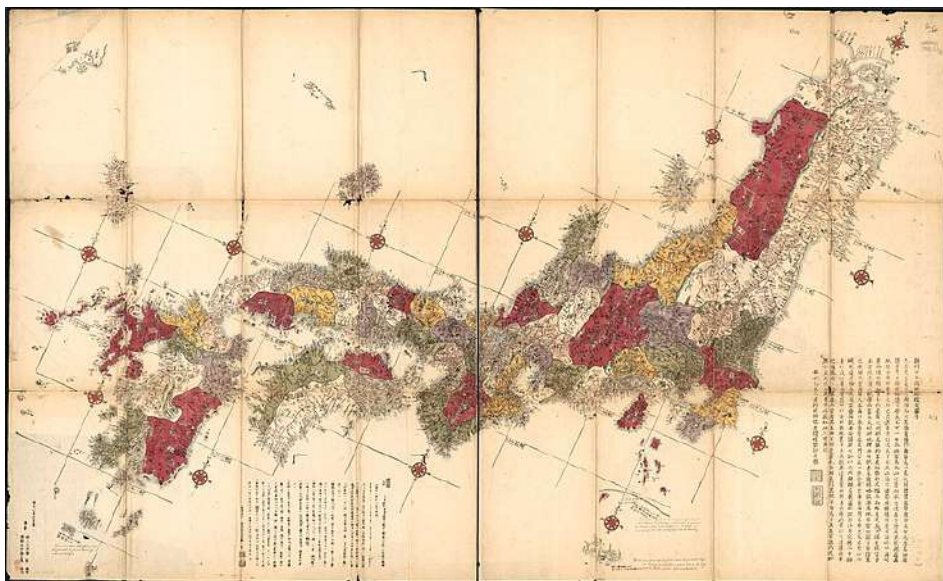
藩の馬子に怪我をさせたのです。「旅にて些細の費を惜しみて大なる恥辱を取る事あり、此事も後來の戒に記せるなり」と苦々しく書いています。

ところで長久保赤水は庄屋を務めていた旧家に生まれ、村に身を置きながら水戸藩の学風を真面目に学び江戸で藩主の侍講までした人です。かたや杏坪もよく知られているように世子斉賢の判読になり江戸へ行っています。しかし何と

いっても両者の共通したところは「困窮する村々の姿を憂いていた」ことかもしれません。それは赤水が死を覚悟して藩主に『農民疾苦』を上程し、杏坪は東北の役人として地方の疲弊を藩に訴えたりしているのですから。

※参考文献※

- ・広島県史 近世資料編VI『老の絮言』
- ・柳田国男校訂『紀行文集「長崎行役日記」』（東京博文館版）



『改正日本輿地路程全図』（1779年初版）アメリカ議会図書館蔵（フリー百科事典「ウィキペディア」より）

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

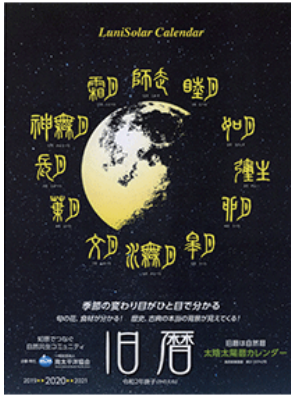
一 硬式テニス参加者募集 一

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

- ・ 火曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・ 水曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・ 土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎080-5610-2376)



「旧暦カレンダー」 (販売価格：1,650円)

- ・ 日本の自然に根差した暦 (こよみ) です。
- ・ 太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
- ・ 新暦 (太陽暦) も併記しているので便利です。
- ・ 季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
- ・ 自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和2年度版、好評販売中！

※今年のはうるう月のある年です。

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
 - 教室&講座案内
 - イベント情報
 - あなたの大切な本の紹介
 - ボランティア・ライター (現地記者) 募集！
- ※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

◇◆◇ どら書房ニュース ◇◆◇

- ・ 毎年2月を、店内&在庫整理のために休業します。
- ただし、九日市の日には開店します。店頭
の無人野菜販売コーナーも続きます。

どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売 (値札のないものは百円均一)。
毎週水曜日の朝に入荷予定 (元旦はお休み)。

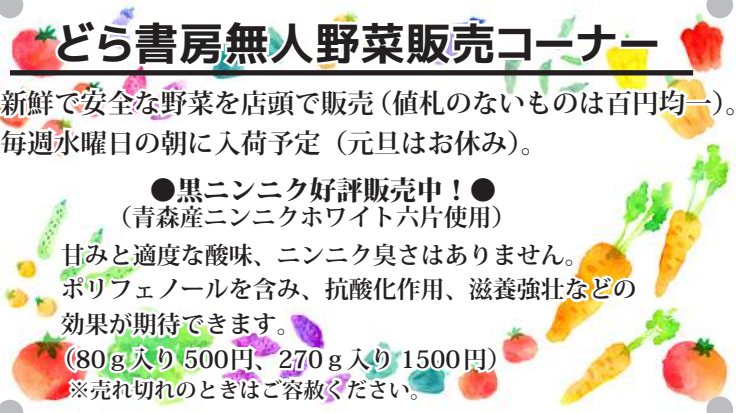
- 黒ニンニク好評販売中！ ●

(青森産ニンニクホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの
効果が期待できます。

(80g入り 500円、270g入り 1500円)

※売れ切れのときはご容赦ください。



編集後記

◇ 令和二年の新年号を
お届けします。わがど
ら書房は、年末年始も
通常通り開店、昨年は
三十日、三十一日が月、
火曜日の定休日でお休
みしましたが、元旦も
関係なく店を開けてい
ます。例年、さすがに正月の
来客は少ないですが、初詣帰
りの人が「あれ？」と驚いた
顔で店に入ってきます。
◇ 現代御伽草子「ラッパの神
様」は今回で終了です。イチヨ
ウが黄葉する時期に合わせて
フィナーレを飾る予定が一月
延びて、画像が時季外れに
なってしまいました。しかし、
原稿量を気にすることなく、
存分に書き込めて楽しかった
ですね。
◇ 本年もよろしくお願い申し
上げます。

発行：どら書房

〒727-0012

庄原市中本町 2-1-10

☎090(9913)3052 (赤川)

e-mail: touzin@sannet.ne.jp

年間購読料：2,000円 (郵送費込)

誌面デザイン: ROUTE183

協賛：九日市愛好会

第 228 回

しょうばらくんちいち 「庄原九日市」

令和元年 1 月 9 日 (木) 9:00~13:00

庄原九日市とは？

天正年間（440 年前）に物々交換で始まった市（いち）

昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し 2001 年に復活

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」令和の貝合わせ

とき：1月8日～10日 10時～15時

※平安時代の遊び体験

1月9日 ①10時30分～②13時30分～

★どら書房 →休憩所あります！！

月曜日と火曜日はお休み。

但し、九日市の日は営業します

★楽笑座で「まかない食堂」開催！！

10:30～12:00 そば 1杯 600円

★楽笑座で「うた声喫茶」開催！！

13:30～15:00 参加料500円

★きくや →総菜とお寿司の店頭サービス！！

★風龍 →九日市スペシャルで餃子200円！

出店配置図



出店申込みは、【毎月 20 日締切】コンパネ 1 枚スペース 1,000 円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町 2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

